

2012年5月13日マタイ1：18－25「神は我々と共におられる」

先週よりマタイ福音書の解き明かしをはじめています。みなさんのお手元に、今週と先週の説教要約が届いていると思います。これは、これから毎週作成する予定にしています。先週はまだ小会ではかっておりませんでしたので、配布するのを待ちましたが、これから毎週このように配布させていただきますので、利用していただきながら、御言葉の理解を深めていただきたい。それをご覧になりますと、先週はどんな解き明かしだったかもわかると思いますが、少し振り返ってみましょう。先週はカタカナばかりの系図を読みましたが、ここにはイエス・キリストの登場に至る救いの物語のあらすじが示されているとお話ししました。聖書というのは、創世記から黙示録の全体を通して、神の救いのご計画とその成就を記している本です。神がこの世界と私たちにどのように関わってくださったか、今どのように関わってくださるのか、そしてこれからどのように関わろうとしてくださるのかを物語る書です。そしてその聖書の中心は、イエス・キリストです。イエス様こそ聖書全体の主人公です。イエス・キリストという存在は、神が私たちの救いのためにさしのべてくださった手であるということも申し上げました。墮落して滅びに向かって突き進んでいく罪人の世界を、再びご自身の手に取り戻し、新たに作り直す、そのために、強い覚悟をもってさしのべられた、決定的な手であるのです。そして今日の記事は、そんな神の決定的な介入が、幼子イエスの誕生という出来事によって始まったのだと知らせてくれます。

聖書においてはこれまでも、歴史の重要な転換点に、幼子の誕生があったということが記録されています。説教要約の右のページに、説教と関連する聖句の一覧も示してあります。私は説教があまり長くなりすぎないように、聖書の引用は最小限にとどめたいと思っていますので、どうぞ皆さんこちらを参考にしてご自分で聖書をひもといてみてください。そして今日の一覧表に、救いの歴史の転換点における幼子の誕生というテーマで、何か所かあげています。そちらを開いていただくと、モーセ、またはサムエルといった人物の誕生物語を、私たちは読むことができるのです。そして覚えていただきたいのは、モーセにしてもサムエルにしても、彼らが生まれてくるときというのは、いずれも時代の苦悩が極まった時であるということです。モーセが生まれてきたのは、神の民の力が増大することに危機感を覚えたエジプトのファラオによって、非情で残忍な抑圧が開始されたまさにその時でありました。サムエルが生まれたのは、神の民の墮落が極まった時です。士師記の最後のほうを見ますと、まったく無秩序にそれぞれが自分勝手にふるまって、神の民が腐敗していく様子がありありと分かります。その結果として彼らは弱体化して、ペリシテ人をはじめとした外国からの圧力にまったく立ち向かうことができず、虐殺と略奪が繰り返されていました。しかしそんな神の民の苦悩を神はご覧になり、モーセ、サムエルといった民族の指導者を与え、民が滅びることがないように常に導いてくださったのです。彼らの誕生は、そんな神の憐みをあらわす、恵みの御業なのです。

そしてここでもまた神は、一人のみどりごの誕生をもって、明確な救いの思いを表してくださいました。しかもイエスの誕生は、聖霊によると言われています。これは、この生まれてき

た方が、これまで生まれてきたようなどんな信仰的英雄とも違う、特別な方であることを示しています。ひとつご注意いただきたいのですが、今日の記事というのはいわゆる処女降誕といひまして、処女であるマリヤが身ごもったという驚くべき奇跡を記す記事でありますし、それゆえにその不思議に気を取られてしまうことが多い。確かにそれは驚くべきことであり、これを信じるか信じないかということが、私たちに一つの決断を要求するのですが、しかしテキストそれ自体の関心は、処女が身ごもったか否かということにはないのです。処女が身ごもったということに、テキストの強調は置かれていません。そうではなく、このテキストが伝えようとしてくれていることは、まさに今、神の決定的な手がさしのべられているのだということです。処女が身ごもったという奇跡は、今がそういう決定的な転換点なのだということを、私たちに明らかにしてくださるために神が用意してくださったしるしであり、いわば神のド派手な演出なのです。大切なことは、神がこの罪の苦悩の極まった時代を憐れんでくださって、そこに救いをもたらすために、今、特別な方を生まれさせてくださる、そのメッセージを正しく聞き取ることです。

そして、このマタイ福音書の伝えるところによれば、そのメッセージを最初に受け取ったのは、ヨセフという若者でありました。ヨセフ、この人は生まれてくる救い主の法的な父として、彼を養うようにと神から選ばれたダビデの末裔です。(主イエスは聖霊によって生まれる神の子だが、法的にはヨセフの子としてダビデの系図に入り、約束のダビデの子としてお生まれになる)。おそらくこのときヨセフは 18,9 歳、マリアに至っては 15,6 ではなかったかとも言われます。若者です。二人は婚約していたとありますが、ユダヤにおいては婚約とは神様の前で結婚の契約を交わすことです。まだ一つ屋根の下で暮らしていないとはいえ、もはや夫婦の間柄です。普通であればもっとも幸せな時とっていい。でも幸せなはずの青年ヨセフは苦悩していた。それは、マリアのおなかに、誰の子か分からぬ子種が宿っていたからです。この子は聖霊によって身ごもったものだということは、すでにマリアには知らされていたと、ルカ福音書を読むと分かります。しかし、そのことはヨセフにはまだ示されていませんでした。ヨセフが知っていたことは、マリアが自分ではない誰かの子を宿しているという事実だけでした。だから彼は苦悩します。

彼は正しい人だったとある。これは一つには神の定めたルールに忠実でありたいと願う、まじめな人間であったということ。そんなヨセフにとって、この婚約者の妊娠の事実は赦しがたい不貞行為としてしか考えることはできなかったと思う。当時のユダヤの法で言えば、もしマリアが他の男と通じたということであれば、これは石打の刑に値します。マリアはそのように告訴されても仕方がない、状況証拠が揃ってしまっている。しかしヨセフは、「マリアのことを表ざたにするのを望まず、ひそかに縁を切ろうと決心した。」ここは表ざたにするのを望まずというよりも、「晒し者（見せしめ、物笑い）にしたくなかった」というほうがよい。なぜか、はっきりしたことは分かりません。当然想像されることは、マリアの自己弁護がなされたということです。私は姦淫の罪は犯していない、おなかの中の子は神様の力によって与えられた、どうか信じて欲しいと、婚約者に必死で訴えたのだと思います。何よりヨセフもまたマリアを愛し

ていたのでしょうか。だからこそ、ただ彼女の罪を糾弾するという仕方ではなく、もっと大きな愛による解決はないかと探ったのではないか。そして苦悩の挙句に、ひそかに離縁するというかたちを取ろうと決断しようとしていたのです。心優しい若者が考え抜いた末の苦渋の決断だったのでしょうか。ヨセフの苦悩の極まった時です。しかし、まさにその苦悩の極まった時に、主は御使いを通して、ヨセフの人生に触れてくださったのです。

御使いはこのように告げました「**ダビデの子ヨセフ、恐れず妻マリアを迎え入れなさい。マリアの胎の子は聖霊によって宿ったのである。マリアは男の子を産む。その子をイエスと名付けなさい。この子は自分の民を罪から救うからである。**」このようにして、思いをはるかに超えた神の聖なる救いのご計画が、悩める若者に明らかにされました。マリアのおなかの中の子は聖霊によって宿った、神の手がこの出来事に関わっておられるのだと、はっきりと示されたのです。それはヨセフを苦悩から解き放つ、大きな喜びの知らせでした。

神はヨセフに約束してくださいました、生まれてくる子は自分の民を罪から救う救い主になる。イエス・キリストは、人間を罪から救う救い主です。罪とは何でしょうか。それは、神との交わりの断絶と言われます。また私がよく使うのは、自分を神とすることであるという言い方です。あるいは、罪とは的外れな生き方ということもしばしば言われます。あるべきところから外れる。神との豊かな交わりに生きるべきなのに、そこから離れてしまっている、そういう的外れが罪という言い方。どれも大切なことであり、根本的なことです。私たちの罪というのは、何よりもまず神様に対する反逆ですから、このことは絶対に押さえておいていただきたい。しかし、罪ということそのように捉えようとする時に、どうしてもどこか観念的な、私たちの生活と結びつけることの難しいお話しだなあと受け取られてしまうことを心配する。そうではなく、罪ということはいつも、私たちの現実の悪を生み出しているということを常に覚えていただきたい。そしてもう一つ、私たちの罪には私たちの現実の悲惨ということが常に伴っていることを忘れてはならない。罪ということ、私たちの具体的な悲惨な現実の中で明らかにされることです。悪に満ち、痛みと苦悩に満ち、悲しみ、やりきれなさに満ちた、一人一人の具体的な現実こそが、私たちの罪の実態です。

そして今日の記事で言えば、若者ヨセフが苦しんだ悩ましい現実こそ、罪の問題そのものであるとも言えます。処女であるはずの婚約者の妊娠という、大きな事件は、経験の乏しい若者の人生を翻弄したとっていいと思います。彼は、人間の悪を思い知らされたでしょう。マリアが裏切ったのかもしれない、あるいは気づかぬ間に犯されたのかもしれない。どちらにしても、彼の幸いだった人生が、だれかの悪意によって切り裂かれたと、彼は思わざるを得なかったでしょう。そんな痛みを私たちもみんな知っていると思います。こういう事件は、私たちの現実にも起こることです。マリアは違うと言ったでしょう。でもそんな彼女をかばって結婚すれば・・・、周囲の人々のヒソヒソ話や、冷たい眼差しが目につくでしょう。それこそ、この若夫婦は晒し者、物笑い、見せしめにあうのです。人間には、人をそのようにして貶めて、いじめたいと願う意地悪な心があるからです。それが人間の罪の現実です。そのような意地悪に憤慨しつつも、毅然として戦うことのできない自分の弱さをも、ヨセフは思い知らされたこ

とでしょう。彼はマリアのために重荷を負う覚悟を持つことはできなかつたのです。そして、夫と妻の間柄でありながらも、決して信じあえぬ悲しさというものも味わつたでしょう。私は姦淫などしていないと聞いても、どうしても信じることができなかつたのではないか。人間は嘘をつきます。その嘘に傷ついて、信じあうことより、憎しみ合うことのほうが正直だと開き直ってしまう。それもまた人間の罪が巻き起こす苦悩です。そんな風に、このヨセフの味わつた苦悩の中に、人間の罪が示されています。思いもよらない事件によって人生が揺るがされる中で、私たちが味わうやりきれなさ、無力さを、ヨセフも味わっています。彼は考え抜いた末に、ひそかに離縁すると決断しました。でもそうすれば、マリアとおなかの子はどうなるでしょうか。とても生きていけません。結局は晒し者になってのたれ死ぬだけです。八方塞なのです。トンネルを抜け出す方法が見つからないのです。どうしようもなく罪深い現実の中で、息ができないような苦しさを味わっている。

それはたとえば、詩篇 130 篇に表わされているような詩人の苦悩に通じる思いです。「深い淵の底から、主よ、あなたを呼びます。主よ、この声を聞き取ってください。嘆き祈るわたしの声に耳を傾けてください。主よ、あなたが罪をすべて心に留められるなら、主よ、だれが耐ええましょう。」神学校の同級生だった松田先生が、この詩篇を引きながら、まるで溺れているようだと言いました。深い苦悩の沼で、もがき苦しんで溺れているようだ。自分がそうだったと。ヨセフもまた同じだったろう。苦悩の中で溺れていたのだと思う。

ヨセフは正しい人だと書かれていました。しかし、ここでの正しい人とは、神の前で非の打ち所のない、完全無欠の人格者ということではありません。そんな人は存在しません。ヨセフが本当の意味で正しい人と呼ばれるならば、それは神の前でのおのれの罪深さをよく知っているということです。徹底的に砕かれて、もう自分は神により頼むことなしには一秒だって生きられないと、知らされた人のことを、聖書では正しい人と呼ぶのです。詩篇 130 篇の詩人も、そういう正しい人でした。彼は言うのですね「主よ、あなたが罪をすべて心に留められるなら、主よ誰が耐え得ましょう。」主が罪を数えられるならば、誰一人として御前に耐え得ない。私も決して生きることはできない。でもそんな私が生きることができるとすれば、それはただ主の憐れみによるのです。赦しの恵みによって生かされる時だけ、私は生きることができる。それを知っているから、4節にこのように続けるのです。「しかし、赦しはあなたのもとにあり、人はあなたを畏れ敬うのです。」この憐れみと赦しの神にただより頼んで、この声を聞き取ってくださいと、叫びをあげている、必死に手を伸ばしている、それが詩篇 130 篇の詩人の姿です。ヨセフもまた同じように、罪人の苦悩の現実の中で嘆き祈つたことでしょう。どうか憐れんでくださいと、必死に手を伸ばしたことだと思えます。

そんな彼の手を、主が引き上げてくださった。私は今日の受胎告知の物語に、そんなヨセフの救いを見る思いがします。深い淵の底から、主よ、あなたを呼びます。主よ、この声を聞き取ってください。嘆き祈るわたしの声に耳を傾けてください。ヨセフに限らず、私たちは誰もが皆、罪深い現実の中で溺れてしまつて、そのよううめき声をあげずにはいられないのではないのでしょうか。その叫びは、聖なる神の前でまったくふさわしくないものです。神の耳に入

れるには、あまりにも汚らわしい罪人の叫びです。でも主はそういう貧しい者の叫びを、決して聞き逃されることはないのです。

神は聖なる手をさしのべて、確かにヨセフの手をとり、彼を苦悩の沼から引き上げてくださいました。彼は確かに引き上げられたのです。それは彼が、妻マリアを離縁することなく迎え入れたという事実から分かります。何の迷いもなかったわけではないでしょう。しかし、彼は御使いを通して示された、神の聖なるご計画を信じて、その言葉に従って歩むことを決断しました。苦悩の現実は何も変わっていません。でも、もはや彼はそこに苦悩だけを見ていないのです。自分とマリアのこの小さな生涯を用いて、神が驚くべき御業をなそうとしておられる、その希望を信じて、苦悩に立ち向かおうとする勇気が与えられたのです。神はこのようにして、罪からの救い主の誕生の知らせをもって、ヨセフを引き上げてくださったのです。その意味でヨセフは、救い主イエスに最初に救われた人とさえ言えるかもしれません。イエス・キリストという救い主はそのように、罪の現実苦悩する私たちをその深みより引き上げて、命と希望の世界へと解放してくださる方なのです。

そして、この罪からの救い主は、インマヌエルと呼ばれるとも書かれています。インマヌエル、それはここに説明されているとおり、神は我々と共におられるという意味のヘブライ語です。イエス・キリストは、神はあなたがたと共におられるのだと私たちに教えてくださる方です。神はもはやあなたがたから遠くない、神とあなたたちとのあいだの決定的な断絶は埋められた。だから、神はあなたを愛しておられる。あなたには神が見えなくても、神はあなたを見ておられて、あなたと確かに共におられる。それは本当なのだと伝えるために、イエス様は自ら人間となってこの地上に降りてきてくださったのです。イエス様は、私たちには決して届かない高みにおられた、聖なる神の独り子である方です。その方が、ヨセフとマリアの子として、苦悩の泥沼のような現実世界に降りて来てくださったのです。ヨセフとマリアは、この後やはり晒し者となって苦しんだことでしょう。そして彼らとともに、幼子イエスも晒し者になったことは容易に想像されます。でも主はそのような現実降りてきてくださって、ヨセフやマリアと共に生きることを選んでくださったのです。このイエス様において、神様は私たちと共に罪人の現実を生きることを始めてくださったのです。ですから、今や私たちは、どれだけ苦悩が深まろうとも、神などどこにおられるのだとは、もう問いません。問わなくてもいいのです。神は、どこまでも私たちと共におられると、イエスの存在が証明しているからです。皆さんの中には、苦しくて溺れそうになっておられる方もきっといらっしゃるでしょう。でも、神はそのあなたと間違いなく共におられるのです。そのことを疑う必要はありません。神は私たちと共におられます。私たちが苦悩する時、そこに神が共におられるのです。

ヨセフとマリアの若い夫婦が、幼子イエスを腕に抱きながら、このインマヌエルの慰めに生かされていたであろうと想像します。私たちもまた、今この心に罪からの救い主をお迎えして、永遠の慰めをいただきましょう。